



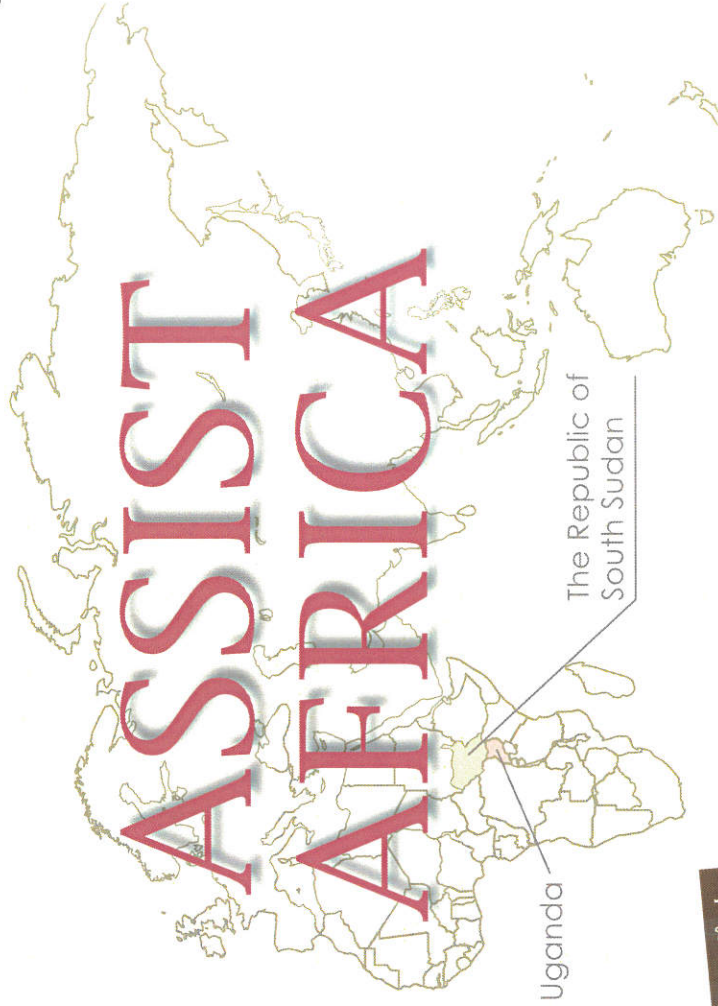
PSN世帯用の家(右)とトイレ。



お年寄りと一緒に世帯トイレを視察するPWJスタッフ。



調査に訪れたPWJスタッフとお年寄り。



ピースウィンズ・ジャパン 現地レポート

アシスト南スーダン!

今、世界でもっとも多くの国内避難民・難民を抱える南スーダン。その現状が日本に伝えられる機会は少なく、知るすべも限られている。未知の国・南スーダンで何が起り、今どうなっているのか? タウトク編集部では、NGOピースウィンズ・ジャバンの協力により、その現実の姿を伝えていきます。支援活動を通じて同スタッフの奮闘のレポートを紹介しつつ、南スーダンが抱える問題を少しずつひもどき、少しでも身近な出来事だと感じられるようにしたい。

株式会社メディアコムでは、読者の皆さんにタウトクを1冊(350円)購入いただくにあたり、その約1%である3円を、南スーダンをはじめアフリカからの復興支援のために送金します。「支援している」という高みに立った目線ではなく、積極的に関わり合いをもつことで現地の様子が気になるようになり、やがて世界で起こっているいろんな紛争や悲劇と、自分たちは決して無縁ではないことを肌で感じるための「3円」だと思っています。ぜひこの1%運動をご理解いただき、本誌連載にご注目ください。

PWJの携帯サイトはこちら!



世界各地で支援活動続けるスタッフからの「現地活動ログ」、最新のNEWSなどの情報が携帯からチェックできるようになりました! 左のQRコードからアクセスしてみてください! <http://www.peace-winds.org/m/>

タウトクでは毎号、南スーダンの国内避難民・難民支援事業へ送金した金額=タウトクの販売部数×3円を読者のみなさんにお知らせします。

タウトク2月号の販売部数

5,191部×3円=15,573円

を支援金としてPWJを通じて南スーダンの国内避難民・難民支援事業に送りました。



月刊タウン情報トクシマ編集部

*本事業は、ジャパン・プラットフォームからの助成金や個人・法人のみさまによる寄付金により実施しています。

① 難民のお年寄りと調査に訪れたPWJスタッフ

つなぐ仕事2 -「特別な支援を必要とする人」とは?-

お年寄りや障がい者、妊婦さん、親とはぐれた子どもたち、シングルマザー。南スーダンからウガンダに逃げた難民の中でも、このような身体および身体能力、健康、家族構成などにより特別な支援が必要な人たちがいます。

「Persons with Special Needs (PSN):
特別な支援を必要とする人たち」

ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)が活動するウガンダ北部のビディビディ居住地区に逃れてきた難民は、提供された資材を使い自分たちで家を建てることになっています。到着してすぐ



はビニールシートと木を組み立てただけの小屋ばかりでしたが、最近はその壁に草ぶ

き屋根がある家を多く目にするようになってきました。難民は割り当てられた敷地内に、トイレも作ります。しかし、自分たちで家やトイレを建てるのが難しい「PSN」には、建てる支援も必要です。

そこで、私たちもこのPSN世帯用にトイレを600軒建てる支援をはじめました。登録時のデータに、1軒1軒訪問して、トイレの建設が必要な世帯を探します。この事業の重要なポイントになりますが、同時に最も難しい作業でもあります。

難民は、到着時に世帯の情報を登録します。しかし、割り当てられた土地から移動して親戚の近くに家を建ててしまったり、妊婦さんは出産したり、病気があった人が治って元気になったり、状況はどんどん変わっていきます。

また、PSNとみなされなかった世帯は自分で建設しなければならぬので、不公平感が生まれやすいよう、非常に気を使います。選定基準の中には「お年寄りと障がい者を優先することがありますが、かといって杓子定規

な対応になっても現実から遠ざかっていきます。基準そのものがとても漠然としているのです。

実際にこんなことがありました。60歳以上のおじいさんとおばあさんが住んでいる世帯を訪問した時のこと。基準としては「お年寄り世帯」になりますが、おじいさんはとても元気で、家の周囲は雨水が入って来ないよう石が積まれ、きれいに補強されています。「昔は家を建てる仕事をしていたからね、このくらい朝飯前だよ」と自慢げでした。一方、HIVに感染し寝たきりになっている女性は、優先される基準には入りませんが、医療支援も受けておらず、トイレを作るどころか日々の生活もひとりでは非常に難しい状態です。更に、難民の8割以上は女性と子どもなので、シングルマザー世帯というのは珍しくなく、むしろ大多数です。小さな子どもを何人も抱えた女性がトイレを自分で建てるということはとても大変なことです。すべてのPSN世帯を支援できれば良いのですが、予算がありません。このようなか中で優先順位を決めるのはとても難しいことです。

この事業を担当する現地スタッフのアレックスは、自身も脚に軽い障がいがあり、特に熱意をもって取り組んでいます。「この人よりもあのの方が支援に値する、なんてことを、私たちに決める権利はありません。それでも、限られたリソースを、より支援を必要としている人に届けることが私たちの仕事です。そのためにも、一軒一軒訪問し、生活されている様子を見て、難民の人のお話をじっくり聞く以外にありません」と話します。



アレックス氏に訪れたアレックスと、人懐こい子どもたち

そろそろ雨季が始まります。雨が降って衛生環境が悪くなり、工事にも支障をきたす前に、一軒でも早くPWJは支援活動を続けていきます。

ウガンダ事業駐在員 竹中奈津子

⑤

④

③

②

①